

【品性訓練(2):謙遜!その神様の祝福の法則】

聖書本文:ピリピ人への手紙2章5-11節/暗唱聖句:ペテロの手紙第一5章6節



愛する信仰の家族のみなさん! 一週間の間もお元気で守られましたか。我々は先週から品性に関する御言葉を学んでいます。先週は忍耐について学ばされ、今日はみなさんとともに謙遜について御言葉を学んでいきたいと思います。神様の関心事は我々の品性にあります。今日も神様は我々がもっているもの、うわべを見ないで心の中心をみておられます。

(第一サムエル記16章7節:「しかし主はサムエルに仰せられた。『彼の容貌や、背の高さをみてはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。』」)

神様が人の心を見るということは品性をみるという意味です。人の品性はすぐには表されませんが、よく観察すればわかります。神様は大切に用いられる人々にまず品性の訓練をされるのだと先週申し上げました。そして、それから主の働きをさせます。品性の訓練ができてない人に働きをさせるのはまるで包丁を使えない子どもに包丁を預けるのと同じです。銃を撃てない子どもに銃を預けるのと同じです。神様に喜ばされる働きは良い品性から滲(にじ)み出る働きです。信仰が神様との関わりであるなら、品性は主に人との関わりを意味します。問題は関係の訓練ができてない人々が働く場合、すぐ高慢になるか、多くの人を傷つけるかですので、神様は働きをさせる前に先に、品性を磨かせてくださるのです。ですから、今日我々は今どんな奉仕をしたいか、働くべきかを考える前に、まず自分はどんな心構えであるか、どんな品性が足りないか、必要であるか自分をよく探ることにもっと関心を持たなければなりません。神様に用いられた人々を見ると、主の働きの前に品性の訓練をさせられました。そして、その品性が磨かれるところは荒野のようなところでした。荒野は苦難の場所でしょう。やまいや、失敗、挫折、絶望、悲しみ、離別などの苦難です。神様が品性を磨かせてくださる時、使われる一番大切な道具は苦難なのです。聖書はイエス様も苦難を通して従順と謙遜を学ばされたと言っています。

“キリストは御子であられるのに、お受けになった多くの苦しみによって従順を学び。”(ヘブル人への手紙5:8)

この従順とともに大切な品性が謙遜です。従順と謙遜は品性の二つの翼のようで、聖殿の二つの柱のようなものです。我々の人生の家を支えてくれる大切な柱であり、我々の人生に翼をつけてくれる一番大切な品性が従順と謙遜です。従順と謙遜は一緒にくっついていて、従順する者が謙遜な者であり、謙遜な者のみが従えるからです。

今日の聖書の本文ピリピ人への手紙 2章5-11節は、イエス様の生涯を圧縮した箇所です。この御言葉に隠されている一番大切なイエス様の品性が従順と謙遜です。

“あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。(ピリピ人への手紙2章5-8節)”

イエス様の品性において一番美しい品性が謙遜だと言えます。イエス様はみずから謙遜な方だと言われました。“わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。”(マタイの福音書11章29節)

初人間だったアダムは不従順と高慢の罪を犯しました。アダムは神様になれないのにもかかわらず、神様のようになりました。その高慢が彼を不従順にさせました。しかし、最後のアダムを象徴するイエスキリストは神様であるのに、十字架で死ぬまで従いました。神様であるのに自分を低くされる謙遜の美德を表してくださいました。そういうわけで神様はイエス様を高くあげてくださいました。小さいイエスになろうと望む我々はいつも謙遜の品性に関心を持たなければなりません。なぜなら、すこしも無関心になると我々の心の中で高慢という雑草がすぐ芽生えて来るからです。

＜謙遜の聖書と原語の意味はどうでしょうか?＞

「謙遜」はヘブル語で‘アナウ’という言葉で‘低くされる、苦しみを受ける、柔和ななど’のような意味を持っています。

特に謙遜を意味するアナウという言葉には苦難の意図的な結果や苦難の目的と関係がある言葉であって、謙遜という品性の実は苦難として神様から頂ける尊い品性の一つであることは分かります。ですから、苦難の中にいる方々はこの時が決して無駄にならないことを信じて下さい。

そして、もう一つラテン語では‘謙遜’と言う言葉は‘フミリタス(humilitas;英humility)’と言う言葉です。面白いところはこの単語の語源が‘フムス(humus)’つまり、‘地’を意味する言葉から始まったと言う事なのです。愛するみなさん! 地はどんな所でしょうか。ある意味で、この世の自然万物の中で地が一番低いところ、みんなに踏まれる所、すべてを受け入れるところ、だから一番汚いところが地ではないでしょうか。しかし、その地の中にいのちが蒔かれ、根をおろし、芽生え、花を咲き、ついに実を結ばせる美しいところも地なのです。みなさん! なぜあんなに一番低いところ、あちこちから踏まれ汚れたところである地がいのちを育て、いのちを結ばせ、いのちを倍加させる美しいところになるのでしょうか。地は上を、空を見上げているからなのです。空の光、エネルギーを頂くからなのです。謙遜も自分を低くし、神様を見上げる者のみに与えられる、結ばれる神様の品性であることをまず忘れないで行きたいと思います。

＜謙遜!神様の祝福を盛る器＞

神様は謙遜な人に恵みを施してくださると約束されました。“しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、

こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」(ヤコブの手紙4:6) ”

そして神様は謙遜な者を大切に思われ、高くあげてくださると約束されました。反対に高慢は破滅に先立ちます。 “高ぶりは破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ。(箴言16:18)” この世から見れば、謙遜な人は力がなくいつも負け犬のようで、損ばかり受けているように見える時があるかも知れません。しかし、神様は時が来たら謙遜な人を高くあげてくださいます。“ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良いときに、あなたがたを高くしてくださるためです。(第一ペテロの手紙5:6)”

そして神様は謙遜な者に知恵もくださると約束されました。“高ぶりが来れば、恥もまた来る。知恵はへりくだる者とともにある。(箴言11:2)”、“主を恐れることは知恵の訓戒である。謙遜は榮譽に先立つ。(箴言15:33)”

愛する信仰の家族のみなさん！謙遜の反対である高慢はどれほど恐ろしいものだと知っていますか。イギリスのC.S.ルイスはこう言いました。“高慢は霊的癌です。それは愛や、自足する心だけではなく常識までかすめとります。”

高慢は我々の霊的な目を閉じさせます。高慢になると耳もふさいでしまいます。常識が通らず、一人将軍になってしまいます。しかし、へりくだる者に知恵が与えられるのは、自分の足りなさを自分が感じ知恵を求めるからです。高慢な人はいつも自分が正しく、自分がすべてを知っていると錯覚しているため、学べないが、へりくだる者はいつも自分の足りなさを感じ、悟ります。どんなに学んでも足りないと思うので、神様の御言葉を学ぼうと努力します。そういうわけで、学べば学ぶほど謙遜にならざるを得ません。謙遜さによってほかの人よりもたくさんの知恵と悟りを得ていても彼はもっとへりくだります。なぜなら、彼に授けられた知恵と悟りは自分から出たのではなく、神様から与えられたことを知っているからです。

そして神様はへりくだった者に平安を約束されました。パーケーパルマル(Parker J. Palmer)は平安をもたらす謙遜についてよく表わしました。“謙遜は我々を低いところに導く。そこは立っていても安全で、倒れても平気な地である。謙遜はその中でもっと充満な自我を見いだすことができる。”みなさん！人はしきりに認められたい、高いところに上がろうとしています。実は一番低いところにいる時一番安全です。揺るぎません。一番低いところにいる時、我々は存在自体に満足することになります。

神様は謙遜という器に大切な恵み、知恵、平安と高くさせてくださる祝福を約束されました。ですから、謙遜は我々クリスチャンがかならず、抱くべき、そして表されるべき大切な品性です。我々の主であるイエス様が謙遜の模範を示してくださいましたように、我々もかならずみならうべき品性です。もちろん、謙遜という品性も自然に、一瞬で磨かれるものではありません。もしかすると、一生涯、日々、この謙遜を学ばなければならないかも知れません。すると聖書の教えるこの大切な謙遜という品性は具体的にどうすることでしょうか？

1. 謙遜というのは自分を低くすることです。

我々はイエス様から謙遜を学ばれます。本文の2章8節に,”キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。”どのように生きることが自分を低くしながらいけることでしょうか。自分を低くするためには自分を無にすることです。イエス様は自分を無にされました(この意味は、イエス様が創造主の神として受けるべき栄光、礼拝、権威、特権などをおろし、却って被造物である人を仕えるために来られたと意味である)。それだけではなくむしろしもべのようになられたのです。自分をひくくするためにはひざをまげなければなりません。そういうわけでへりくだった人はひざまずいて祈ることができます。ダニエルもそうだったし、使徒パウロも、そしてイエス様もそれされました。そしてひざまずいて仕えなければなりません。イエス様はひざまずいて弟子たちの足を洗ってくださいました。ルカの福音書22:27を読んで見ましょうか。“食卓に着く人と給仕する者と、どちらが偉いでしょうか。むしろ、食卓に着く人でしょう。しかし、わたしは、あなたがたのうちにあって給仕する者のようにしています。”

さらに自分を低くする謙遜を実践する方法はほかの人を高くあげるとき可能になります。ほかの人を高くしてあげる時、我々はもっと低くされる謙遜を実践することができるでしょう。

2. 謙遜というのは自分の居場所を守ることです。

イエス様は自分を低くしただけではなく自分の位置を守られました。イエス様は神様の一人子です。イエス様は父なる神様を掲げました。そして子としての自分の位置を徹底的に守られました。すべての万物と人は自分がいるべきところにいるとき一番美しいではありませんか。旧約聖書イザヤ14章は自分の位置を忘却している明けの明星が現れます。明けの明星はその当時バベロンの王を一次的に意味しています。また、墮落した天使をも象徴しますが、美しい天使がどうやってサタンになったのかその根拠を提供して下さる御言葉です。美しかった天使が墮落した理由は自分の位置を忘れたから、離れたからです(イザヤ書14:12-15)。墮落した天使はたかぶってしまい、それで、一番高い神様と競争しようとしていました。そういうわけでサタンの霊は今日も我々に高慢をけしかけて競争と争いを起こさせます。聖書はこの高慢こそ一番大きい罪だと教えます。これらのことを考えると神様は自分の位置を守りながら、最善の道を歩むようにと助けてくださいます。ですから、自分の位置を守ることこそ謙遜です。

3. 謙遜は自分の役割を知ることです。

イエス様と同時代にイエス様より多くの人々に認められていた人がいました。だれでしょうか。バプテスマヨハネでした。自分の位置をよく知っていて、自分の役割をもよく知っていたへりくだった人でした。自分の役割を知るために彼はまず自分のアイデンティティを知りました。バプテスマのヨハネは自分がキリストではないことを知っていました。キリストの道を整える人、荒野の声であることを知っていました。バプテスマのヨハネは自分を正確に知っていたので、自分の位置を守ることができ、自分の役割を果たすことができました。それだけではなく自分の役割に自足することもできました。

“彼は告白して否まず、「私はキリストではありません。」と言明した。(ヨハネの福音書1:20)”、“彼は言った。「私は、預言者イザヤが言ったように「主の道をまっすぐにせよ。」と荒野で叫んでいる者の声です。」(ヨハネの福音書1:23)”
そしてバプテスマヨハネはイエス様にこのような告白をします。“あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。(ヨハネ福音書3:30)”イエス様の謙遜も自分の役割を知っておられました。イエス様は神様のご計画を成し遂げるためにこの地に來られました。失われた魂を救うために來られました。しかし、イエス様はこの地に來られ、十字架の死による贖いのために來られたのにもかかわらず、その役割を最後まで果し、謙遜の模範をみせてくださいました。

4. 謙遜は自分の限界を知り、認めることです。

謙遜は自分の限界を知り、その限界を認めることです。人間には二つの面があります。神様の似姿に造られた人間は無限の可能性を持っている存在であることです。人間内には無限の潜在力があり、想像をぜっする可能性があります。なぜなら神様の形によって造られたからです。しかし、もう一つの面は人間は限界をも持っている存在であることです。神様は自分の限界を知らず高慢な人をおそろしく扱われ、それを折らせます。使徒の働き12章にヘロデ王は自分の声がまるで神の声のように、自分を神のように思い、神様に栄光を帰さないで、自分が受けようとした時、神様は主の御使いを遣わし、虫にかまれて死なせました(使徒の働き12:21-23)。

愛する信仰の家族のみなさん!自分の可能性とともにいつも自分の限界をも神様の御前で知り、認めることが謙遜の始まりです。自分にはできないことをしてはならないことを知っているので自制します。それが謙遜です。使徒パウロは能力のある偉大な神様の人でしたが、いつも自分の限界を知って告白する謙遜な使徒でした。コリントの教会の信徒たちがそれぞれ従っている靈的指導者のことで論争している時パウロは自分の限界を謙遜に認めます。“私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です(コリント人への手紙第一3章6-7節)。”

へりくだった人たちは一様に自分の位置と役割、そして限界を正確に知り、よく認めます。こんにち我々みんなは賞賛に中毒されています。だれもがほめられたがり、認められたがります。特権を楽しみたがります。しかし、我々はどんなにほめられても自分のアイデンティティと限界を忘れてはいけません。自分の弱さを知っている人、自分の限界をよく認める人はほかの人に対してむやみに言いません。そしていつも謙遜に神様の御前で祈ります。我々にもこのような謙遜があるように祈ります。

＜適用:謙遜の衣を日々まといましよう。＞

神様はいつも我々の姿を見ておられます。我々の心を見抜いてくださいます。我々が見せるべき姿はへりくだった姿とへりくだった心です。謙遜という品性についてともに考えて見ました。謙遜という品性はたやすく得られるものではありません。一生の間、取り組むべき品性です。神様であられるイエス・キリストのほかだれも自分が謙遜だと言える人はだれもないのでなおさら尊いのです。謙遜は我々は毎日衣を着替えるように選ぶべき品性です。使徒パウロは謙遜を身に着けるようにと言いました。

“それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。(コロサイ人への手紙3章12節)”

毎朝着る服を選んで着るように毎日選び取るべき品性の衣が謙遜です。謙遜という品性は決して自然に作られるものではありません。服を選ぶように、選び取るべきです。服を着替えるように我々の存在にいつも留まらせなければなりません。謙遜という品性の神様の品性です。ですから、聖霊の助けを頂かなければなりません。そのとき御霊の御として我々の生活に表されます。神様はへりくだった者に無限の祝福を与えてくださいます。日々、謙遜を身につけ、日々、謙遜を選び取りましよう。謙遜は神様からのあらゆる祝福をひっぱる磁石であることを覚えましよう。どんなに偉大な業績を残し、すばらしい成功を残しても、謙遜がなければ神様の御前ではなんの意味がありません。

今日を祝福のチャンスとしてつかみましよう。へりくだったイエス様のように我々も自分を低く指せ、自分の位置と役割と限界を覚えましよう。謙遜という品性を身に着けることは一生涯の目標でなければならない課題です。クリスチャンプレイズチャーチで信仰の生活をしているみなさんはイエス様のように謙遜の衣を着て、神様の祝福をいただく器となりますように主の御名によって祝福します。アーメン!